

ちょんぼし語録②

第6号のアンケートで、たくさんの「心に残る方言」が寄せられました。ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

寄せられたアンケートの中で、心に響いたあいさつ言葉がありましたので紹介したいと思います。

「ご早ように おしまいなさいませ」(大森町出身男性)

「おしまいなさいました」(大代町出身女性)

一日が大患なく終わろうとしている夕暮れ、主に女性が使う、夕方のあいさつだったようです。

きめ細やかな気遣い、思いやりがこめられた、とても優しいあいさつ言葉ですね。

この言葉が消えてしまわないように、普段の会話に取り入れてみようかと思っています。

【用例】

おばさん 「おしまいなさいまして」

隣のおじさん「こないだまで、ご一ぎに暑くて、よ～にやれんかったに、はあ、いつだれわからんが、日が短こうなりましたなあ」

おばさん 「さいさい、そろそろ鍋もんの時期になってきたけえ、今晚はうちで、へか焼きでもしようと思うが、あんたもよっちゃんさいや」

おじさん 「そがだかな？そいだら、一回いんでから、行かしてもらいますけえ」

おばさん 「こないだみたいのうちのと、あんさんと二人で飲んだくれとると、よおお～に鍋がしじれてしまうけねえ、今日はちと爛の数をへらさにゃあやれまいてな」

おじさん 「そが言わんこに～」

【訳】

おばさん 「こんばんは」

おじさん 「この間まで、とても暑くて、かなわなかったのに、いつの頃からか、日が短くなりましたねえ」

おばさん 「そうですねえ。そろそろ鍋物の季節になってきたので、我が家の夕食はへか焼き（魚のすき焼き）をしようと思いますが、あなたもいらっしゃいませんか」

おじさん 「そうですね？では、一度帰ってから、お邪魔させてもらいましょう」

おばさん 「この前みたいに、うちの主人とあなたと二人で飲んだくれると、鍋が煮詰まってしまうからね、今日は少し、爛の数を減らさないといけませんね」

おじさん 「そんなこと言わないでくださいよ」

シリーズ新石見銀山⑦

「世界遺産登録」

夏果てて秋の来るにはあらず。・・・夏よりすでに秋は通ひ、秋はすなわち寒くなり

(徒然草)

みなさんこの秋をいかがお過ごしでしょうか。

ちょうど今年のこの頃から、石見銀山の世界遺産登録の可否についてさまざまな出来事があり、遠方にいらっしゃるみなさまも報道を通じて一喜一憂をされたことでしょうか。さる7月2日、めでたく登録が決定し喜びをわかちあえたと思います。渦中にいたわたしはビックリギョウテン、登録当日の記憶はまったく残っていませんが。

さて、9月下旬の仕事帰り、夜空にぼっかり浮かんだ満月をしぼし見上げていました。翌日の新聞によると、9月27日「中秋の名月」の夜でした。今回はその夜に感じたことを書くこととします。

銀山の採鉱は、日夜を問わず行なわれていたので、夜番の勤務者もいました。山中の夜中の坑道では、入出の坑夫や監視の役人などがうごめき、周辺では、彼らを支える家族の煮炊きの煙も、小さな明かりに透かして昇っていたことでしょうか。幕末頃の地役人



日記を読むと、良質の鉱床を探し当てる努力や苦悩を推し量ることができる一方、豊かな社会生活が営まれていたと読み取れる部分もたくさんあります。

ひとつの種本で決め付けはできないのですが、鉱山に働く無名の人たちの「月見る月はこの月の月。今夜は中秋の満月だから月を見よう」のひとコマが、400年続いた石見銀山の歴史にあったと確信しています。そして、静かな気持ちで夜空に向かえば、銀山の精霊たちは、「世界遺産登録おめでとう」とひめやかに語ってくれることでしょうか。